世界から言葉を引けば

石川喬司

河出書房新社

世界から言葉を引けば

石川喬司

河出書房新社

世界から言葉を引けば

昭和五十三年十一月十日　初版印刷
昭和五十三年十一月十五日　初版発行

著者　石川喬司
装画　山本文彦
装幀　田澤司
発行者　佐藤晧三
発行所　株式会社　河出書房新社・東京都新宿区住吉町九五
電話（〇三）三五五一五三一一（営業）
（〇三）三五五一五三二一（編集）
振替（東京）〇一一〇八〇二
印刷所　株式会社亨有堂
製本所　小高製本工業株式会社

©1978　定価はカバー・帯にあります

目次

アチラ……5
夢の国から来た男……19
モンテカルロ法……53
夜のバス……79
こぞの雪……95
棒……125
世界から言葉を引けば……149
穴の中の冒険……185
提灯……215
燈台まで……225
螢……245

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

世界から言葉を引けば

ア

チ

ラ

夢のなかに、ぼくは行きつけの古本屋を持っている。いつかも書いたが、その店へ行くには、ややこしい就眠儀式が必要だ。――まず磁石を使って布団を正確に西枕にし、仰向けに横たわる。胸の上で静かに合掌したまま、百数えるあいだ呼吸をとめる。その間に昼間の世界のすべてを忘れてしまうのだ。それが終ると、いよいよ本番である。体のあちこちについている空想のポケットから、ゴム風船を取出してふくらます操作を、頭のなかで繰返すのだが、これがむずかしい。前頭葉ポケット、右肺ポケット、左肺ポケット、胃ポケット、陰嚢ポケット、肛門ポケット……たくさんの空想の風船がふくらむにつれて、ぼくの体は次第に空中に浮かんでいく……。

夢のなかの街は、槍のように尖った高いビルがやたらと多いうえ、いつも霧が深いときているので、まったく神経が疲れる。上昇するときはまだしも楽だが、下降するときのあの胸苦しさ。

濃い霧の中におぼろな目標をやっと見定めて下降の姿勢をとったとたん、貧血を起こしてふらふらと墜落しそうになる。足の曲げ方、息の抜き方、風船のしぼませ方、すべてに高度なテクニックを要するのだ。もし失敗すれば、槍のようなビルにお尻を突き刺されて、目がさめてしまう。

ぼくがその古本屋へ通いはじめてから、かれこれ三十年になるのだが、いまだに空中歩行術は上達しない。霧に包まれた摩天楼の彼方、寝呆けた虹のようにかかる大橋のたもとに、めざす古本屋の、ひなびた風見鶏のついた屋根が見えてくるころ、ぼくはもう緊張でクタクタになっている。

夢のなかでまでそんなに苦労をすることはないじゃないか、という人がいるかもしれない。しかしその人は、そのあとにひかえている楽しみを知らないのだ。

古本屋の風見鶏を見下ろしながら、ぼくは呼吸をととのえ、慎重に風船を操って、店の前の露地に着陸する。露地を挾んで銭湯の裏口があり、着陸するとき、天窓越しにチラッと夢の街の女たちの裸がのぞける。だが、ぼくの関心は、古本屋の飾り窓にあり、女の裸などどうでもいい。

その飾り窓は、いつも奇蹟の宝庫である。『予言機械製作必携』とか『こうすれば透明人間になれる！』とか『未来世界史』とか『一週間でマスターできる動・植物との会話術』とか『世界女優恥部立体図鑑・フランス篇』とか『一目でわかる宇宙解剖図』とか『明日のギャンブル出目一覧表』とか『死者再生術ガイド』とか『あなたの一生を教えます』とか『タイムマシンの簡単

な作り方』とか『テレポーティション入門』とか『瞬間変装術ＡＢＣ』とか『人工生命培養記録』とか『冥王星開拓秘話』とか――そういったヨダレの出そうな、昼間の人間が知らない秘密を盛った本が、たえず並べられているのだ。

最初のころ、ぼくはショー・ケースに顔を押しつけ、必死になって、開かれたそのページを読もうとしたものだ。「……脈動空間の多元的相似性については……」「……キーストンとメジロボサツの悲恋を知れば……」「……時間が一つの人格であるという画期的な発見も……」――しかしそれは空しい試みだった。ページがすぐ透明になってしまい、一行と満足に読めやしない。しかしその後、工夫研究を重ねた結果、ぼくはある秘法を編みだした。その秘法によって、ある程度まで、夢の本を読めるようになった。

古本屋の親爺は、いつも体中から埃を立てながら、あたふたと現われる。親爺とは中学時代からの馴染みである。夢の街の住人は、いつまでたっても年齢をとらない。こちらが一方的に親爺の年齢に近づいていく感じは、奇妙なものだ。いずれぼくの方が親爺よりも年上になるのだと思うと、どうも落着かない。

親爺はぼくを見ると、右の義眼に手をやってそれを取りはずし、眼窠から新しく古本市で仕入れてきた珍品を出してみせ、

「どうですい、こりゃ掘出しもんでしょうが」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

と低い、仁丹のにおう声で囁きかけてくるのである。

――ぼくが谷さゆりの小説の載っている問題の雑誌に出会ったのも、そういうふうにしてであった。

あれはたしか木枯しの吹きすさぶ冬の夜だった。店の土間に吊した裸電球がときどき消えそうになったのを覚えている。

親爺が眼窠から得意そうに取出してみせたのは、大判のグラフ雑誌だった。ジンタの『天然の美』を蝙蝠が銜えている絵が表紙になっており（そんな絵があるものか、などと怒らないでいただきたい）、《OW―SF》11号という題字がついていた。

ぼくはいつものように、特製手袋をはめた手で親爺からその雑誌を受取ると、慎重に捧げ持って、人気のない静まりかえった古本の谷間を通り抜け、地下室への石段を降りて行った。その途中で――というよりも、親爺から受取ったか受取らないうちに、雑誌は早くも透明になって姿を消してしまっていたが、慣れっこになっているぼくは、少しもあわてず、雑誌を捧げ持った姿勢を崩さないで、石段を降りきり、マネキン人形が転がっている地下室の突当りのドアを開けた。

たいていの場合、そこはトイレだった。ときどき食堂だったり、ゲーム室だったりすることも

ある。その日はトイレだった。宇宙船のような形をした洋式便器が部屋の中央で明滅していた。「お邪魔します」と声をかけて、ぼくはその便器に腰をおろした。便器はぼくの尻の形に変形して、ぼくを歓迎した。

両手に捧げ持った透明な雑誌の透明なページをぼくはめくった。そのまま暫く待っていると、雑誌が次第に生き返ってきた。とりかえしのつかぬ悔恨を思わせる奇妙なイラストに飾られた目次が浮かびあがり、そして——突然あの名前が目に飛びこんだのだった。

アチラ　　谷　さゆり

谷さゆりが小説を？　ぼくは大急ぎでそのページをさがした。しかし雑誌は再び透明になりはじめ、めざすページに行きつかぬうちに、姿を消してしまった。

仕方がない、次の出現まで待つしかない。ぼくはボンヤリとトイレの中を見回した。隅っこで、首から上のない侏儒（こびと）の四人組が、例によって拳（けん）を戦わせていた。連中の首は、天井近くのウインゾル風の吊り棚に飾られている。いつかその四つの首の中央に、カッと目を見開いた三島由紀夫の首があって、途端に目がさめたことがあった。

視線を両手にもどすと、雑誌が蘇っており、右のページに光輪のカタログ、左のページに笑い

のカタログの広告が載っていた。谷さゆりの小説は、その次のページだった。

書き出しに、ぼくは目をこらした。

「YYY　YYYY　YYYYY　YY　Y　YYYYY　YYYYYY……」

そこまでで、また読めなくなった。

ぼくは便器の隠し引出しから豆辞引を取出して、いま読んだ書き出しの翻訳にとりかかった。

翻訳A「ほんとうのことを言えば、私は時間を旅するのが恐かったのです。でも冤罪を晴らすこともできず無念の涙をのんで死んでいった、あれらの人びとのことを思うと……」

翻訳B「お願い。夢を言葉にしないで。それは砂時計の砂よ。輪廻の蛇よ。合わせ鏡の無間地獄よ。怨念の指輪よ……」

翻訳C「タカシ……タカシ……タカシ……タカシ……ああ、ああ、ああ、ああ……」

翻訳D

……

いつもこうなのだ。夢の本は、翻訳するたびに、内容が変わってくる。ぼくは、これまでの経験にしたがって、四種類の訳を試み、ちょっと考えてから、BとDは捨てることにした。便器が

グニャリと同意した。

さて、AとCのどちらで行くか？　Aに決めようかな、Cはあまりにも直訳すぎるから――そう結論を出そうとした途端、熱湯が下から噴出してきて、トイレ全体が急激に収縮を始めた。異議アリ、の意思表示である。急性空間欠乏症で、ぼくは気を失った。

気がつくと、ぼくはガランとした劇場のカブリツキに坐っていた。

「どうですい、掘出しもんでしょうが、あの娘」

古本屋の親爺が後ろの席から仁丹のにおいをさせながら囁きかけてきた。

舞台では、谷さゆりがオナニーの最中だった。彼女は全裸のからだをくねらせながら、切れぎれにぼくの名を呼んでいた。

「タカシ……タカシ……タカシ……ああ、ああ、ああ、ああ……」

「やっぱりCでござんしたね。私はBが本命だと思ってやしたが。――いくらぐらい配当がつくでしょうなあ」

古本屋の親爺はズボンをずりさげて、股間の逸物をしごきだした。案に相違して隆々たるもので、しかも驚いたことに、それが二本もあった。

「二本も！」

とぼくは叫んだ。

「こいつはウィークデー用、こっちはウィークエンド用。まるでカンガルーですな。まだ他にもありやすぜ。どうです、一本」

親爺は手品師のような手つきで、一本ひっこぬいて、ぼくに差出し、ぼくが躊躇っていると、それをしゃぶりはじめた。

「タカシ……タカシ……ああ、ああ、ああ……」

谷さゆりは激しく痙攣し、そしてぐったりと静まった。

(ああ、あのときの状況が再現されているんだな)とぼくは気がついた。(それではスロー・ビデオでもう一度見てみよう)

……谷さゆりがNミュージック劇場の舞台で熱演中に急死したとき、ぼくはやはりカブリツキに坐っていた。彼女のベッド・ショウが評判で、劇場は超満員だった。ぼくは四時間も粘って、やっとその席に到達したのだった。だから彼女の熱演を見るのは、その日三度目で、もういい加減ウンザリしていていいはずなのに、そうではなかった。三度とも新鮮で、同じことの繰返しという感じを与えないのだ。演技のどこかに、安易な手抜き、職業的惰性、マンネリズムが顔をのぞかせるはずだ、とぼくは意地悪な目で、彼女の表情や動きを観察しつづけた。それを見つけだすために、四時間も粘っていたのである。むかし胆振(ぢり)キチサ嬢という〝アイヌ・ヌード界の女王〟が、そのような観察意欲をぼくに起こさせたことがあり、彼女は三度目に到頭シッポを出し

た。クライマックスの痙攣のあと、しばらくうっとりと目を細めていたキチサ嬢はやがて、カブリツキからさらに身を乗り出していたぼくの耳許に口を寄せ、その刺青した唇をニヤリと耳まで裂いて、こう言ったのだ。「ショウバイジャ」

谷さゆりの擬態を見破ってやろう、と目を光らせているぼくの10センチ前で、彼女はセーラー服を脱ぎ捨て、パンティをずりおろした。うるんだ彼女の目が、ぼくに向けられた。

「あなたのお名前、ここに書いて」

赤いサイン・ペンをぼくは受取り、指示されたとおり、両方の乳房と臍の下に、それぞれ一文字ずつ平仮名で、たかし、と書いた。そうやって肌に書かれた客の名前を、喘ぎとともに呼びつづける、というのが、谷さゆりのベッド・ショウの趣向だったのである。

やがて彼女はその文字のあたりを撫でながら、喘ぎを洩らしはじめた。

「タカシ……タカシ……ああ、ああ」

「いいぞいいぞ。その調子でスロー・ビデオだ。真面目におやんなさいよ」

古本屋の親爺が舞台に声をかけた。

木枯しが、観客の二人しかいない客席に吹きこんできた。裸電球がひとしきり揺れ、そして消えた。暗闇のなかから声が聞こえてきた。

「……失敗でしたな。この再生装置はどうもうまく働かない。これで谷さゆりの死の真相究明は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.